

書籍紹介

『米軍医が見た占領下京都の 600 日』 二至村菁 著 藤原書店 2015 年

1947 年秋、アメリカからインターンを終えた若きジョン・D・グリスマン軍医は、GHQ 占領下の日本にやってきた。赴任先は、京都府庁衛生部。彼は 61 通の私信で日本占領の理不尽な内情を両親に書き送り、当時高価だったコダックのカラーフィルムで 100 枚をこえる写真を撮影した。本書は、後にグリスマン氏やその家族からそれらの手紙や写真を入手した著者(1947 年京都生れ)が、丹念に資料にあたり、関係者らに取材したノンフィクション。アメリカ人軍医の私信を軸として、GHQ 未発表の資料を含む多数の資料や証言をおりこみ、米軍占領下京都における日米の人間群像を鮮やかに描いている。

紹介されるエピソードは生き生きとしていて物語としても面白く、同時に貴重な歴史記録でもある。例えばジフテリア・ワクチン事故の責任転嫁問題、ソ連占領地域からの引揚げ女性の組織的妊娠中絶などの知られざる事実も明かされ、また、日野原重明氏(聖路加国際病院名誉院長)のすすめもあって、関係者への配慮で割愛するか迷った 731 部隊に関する話も残したという。

カラー口絵 16 頁、本書関連公衆衛生史年表(1902～2000)、事項・人名索引つき。

●主な目次

〈プロローグ〉旅立ち——1947 年 9 月

I 京都へ来たくなかった米軍医——1947 年

京都到着／七日がたって／京のもてなしと結核／引揚港、舞鶴／京都の売れ筋事業／貧富の中身／満州からの道のり／前任軍医／引揚港の婦人相談／仏面獣心の京女／クリスマスと学生たち／上官サムス大佐

II 米軍支配を耐える京都のひとびと——1948 年

善意の限界／PX の若者／日本人を健康にする作戦／トラホーム／病院ストは是非か／老いと母の日／いつでも性病感染中／米留学解禁／福井大地震／降伏の記憶／七三一部隊からの帰還／アメリカ式看護／日本がえらんだ人口対策／ジフテリア予防接種事故

III 別れと自立——1949 年

密輸された特効薬／ハンセン病の外来治療／別れの贈り物／京都出発／京都占領終了／米軍が去ったあとの京都
〈エピローグ〉四〇年後にかかってきた電話

——2000 年 2 月